【特集】

南アジアの石製ビーズ産業の現在
インド国内における生産と消費

人間文化研究機構／秋田大学
遠藤　仁

1　はじめに

南アジアは、複数の地域で貴石（precious stone）や準（半）貴石（semi-precious stone）などが豊富に産出することから、歴史的に石製ビーズをはじめとする石製装身具生産の盛んな地域です。現在でも、ラージャスターン、グジャラート、アーンドラ・プラデーシュ州などが世界的にも生産地として名前が知られています。

本稿では、その中でもインド西部のグジャラート州アーナンド県カンバート

図１　インド西部および北東部の位置（筆者作図）

E-mail：lithicmaster@yahoo.co.jp

（Khambhat）の、伝統的な石製装身具生産工房への調査結果から読み解いた、石製ビーズ生産工程の技術特性の詳細を紹介します。また、カンバートで生産された石製ビーズに関して、その国内での消費動向についても紹介します。近年ではインドでの国内需要は落ち込む一方であり、その販売に苦慮していますが、この 100 年ほど消費地としてインド北東部のナガランド州やマニプル州での需要が高まっています。そこで、インド北東部について、おもに民族集団ナガの石製装身具の使用状況を明らかにし、彼らの社会構造に石製装身具が与えた、ここ 100 年ほどの影響に関して若干の考察を加えます。

2　石製ビーズ（装身具）とはどのようなものか？

石製ビーズなど装身具の素材の多くは、昔から準貴石と呼ばれるものが多用されています。準貴石は、貴石よりも稀少性の低い石の総称で、明確な定義が設けられているわけではありませんが、瑪瑙（agate）や、紅玉髄（carnelian）、玉髄（chalcedony）、碧玉（jasper）、水晶（crystal）など比較的産出量の多いものを指すことが多いです。一方貴石は、ダイヤモンド（diamond）や、ルビー（ruby）、サファイア（sapphire）、翡翠（jade）など希少で金銭的価値が非常に高いものを指すことが多いです。また、翡翠などを除き、貴石は非常に硬く加工が容易でないものが多く、人類が装身具に利用をしてきたものの多くは準貴石でした。

準貴石には半透明のものと、透過性のない石の両方があり、その色彩も多様であり、天然の模様があるものもあります。装身具にはそのような特徴をうまく生かし、おもに首飾りや耳飾り、指輪などの一部として利用してきました。装身具の示す役割をまとめると、①美的、②精神的（宗教・呪術・占い）、③社会的（アイデンティティ・階層・嗜好）、④経済的価値を他者に示すために身に着けるものです。これらは、使用された時代や地域により異なりますが、先史時代から現在まで、石製装身具に関しては数千年間人類に嗜好され続けているため、ある程度普遍的価値をもつものと言えます。

3　南アジアにおける石製ビーズ産業の現在

南アジアはインダス文明（紀元前 2700 ～ 1900 年頃）以前から、石製装身具（おもにビーズ）の生産地として知られていました。とくにインダス文明期には、石製ビーズは遠距離交易品としてメソポタミアをはじめとした各地に輸出されていました。その生産は現在まで継続し、盛んに生産と輸出が行われています。

現在のインドでは約 140 万人が貴石・準貴石産業に従事していると言われています［Karanth 2000］。その生産の中心は、ラージャスターン、グジャラート、アーンドラ・プラデーシュ州などです。その工房の多くは家内制手工業の小規模なもので、小型グラインダー、電動ドリルなどを用いての機械化が進んでいますが、いまだに大規模な工場生産化はなされていません。このような現状で、伝統的な技術や社会組織を維持したまま、住民の多くが石製装身具産業に従事する特異な町がインド西部のグジャラート州に存在します。以下では、グジャラート州アーナンド県カンバートでのビーズ生産の生産技術の概要を紹介します。

カンバートは、現在は人口約 10 万人の小規模な町ですが、中世においては南アジアの主要な貿易港の 1 つであり、世界の石製装身具の主要な供給地の 1 つでもありました。現在では、生産量での世界的な影響力は少ないものの、少なくとも中世以降、石製装身具生産を途絶えることなく続けており、機械化の影響はあるものの伝統的な生産技術を保持

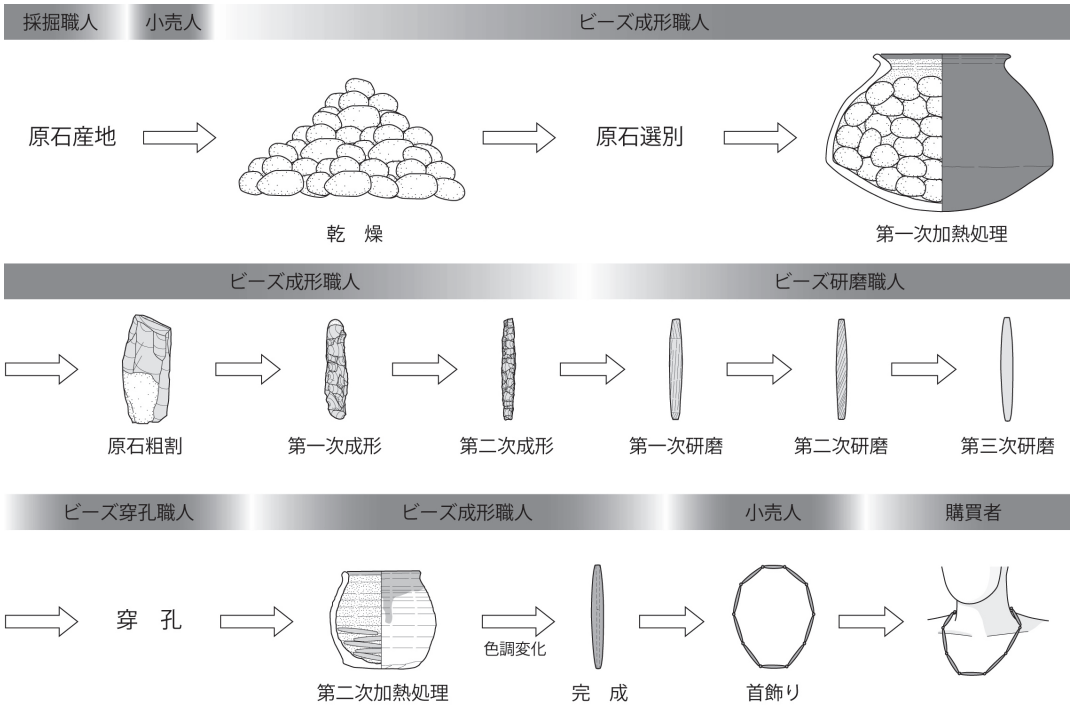

図 2　カンバートでの石製ビーズ生産工程模式図
出典：［遠藤・小磯 2011: 353］

した稀有な町であります。カンバートには、石製装身具生産を担うアキーク・ワーラー（akik wala：直訳すると瑪瑙屋）と呼ばれる職人が多く居住しており、その生産技術体系を以下、［遠藤・小磯 2011］にしたがい順を追って概説します（**図 2**）。

①原石の採掘

インダス文明以前から知られていたと推定される石材産地がカンバートから百数十 km 以内に複数存在し、それらの採掘は現在も行われています。ただし、機械化はほとんど進行しておらず、現在でも多くは手掘りで採掘しています。その採掘に従事するのは、インド憲法上で指定部族民とされるマイノリティーである民族集団ビール（Bhil）とシッディー（Siddhi）です。採掘された原石は、運搬業者によりカンバートにトラックなどで運ばれます。

②成形技術

現在では、石製装身具は合成ダイヤモンドを装着したグラインダーで切断を繰り返すことで行われるのが主流です。しかしカンバートでは、先史時代の石器製作技術と類似した、石を打ち欠いて成形する技術を継承しています。これは地面に斜めに埋め込んだ鉄のピンに石を軽く当て、石を水牛角製の軟らかいハンマーで叩く、間接打撃と呼ばれる技術で、これを繰り返すことにより、石の形を目的の形へと近づけていきます（**写真 1**）。

③研磨技術

近年、電動の研磨機が導入され、ほとんどの工房が機械化しています。しかし、20 年ほど前までは、皮袋に石を複数いれ、それに水をかけて皮袋を動かし石同士を擦り合わせて研磨する技法や、研磨機を手動で回転させる技法が残されていました。この伝統的な手法は、研磨に膨大な時間がかかるため、電動

写真 1　間接打撃技術で石製ビーズを成形する職人（2010 年 2 月 27 日筆者撮影）

の研磨機の普及は一気に進みました。

研磨作業は、伝統的な技法でも機械化されたものでも、研磨時に多量の石の粉塵が舞うことになり、それを吸引する職人は肺を病み（じん肺になると考えられます）、若死にする者が多いです。彼らは肺を病むことを、真面目な職人の証として尊ぶ傾向があります。筆者は調査対象の職人（彼の父親もじん肺と見られる症状で、50 代で死去）に、じん肺予防用の特殊マスクなどをプレゼントしましたが、中々使ってくれません。

④穿孔作業

石製装身具のうち、ビーズは穿孔をする必要があります。現在ではカンバートにも、中国製の安価な超音波振動式の穿孔器が導入され、多くの工房がそれを利用しています。しかし、現在でも数人、伝統的な穿孔技術を保持している職人がいます。それは弓錐技法と呼ばれるもので、木製の万力でビーズを固定し、弓を前後に動かし、それにより錐を回転させ穿孔するものです（**写真 2**）。現在この技術を保有する職人に後継者はいなく、近いうちに途絶する運命にある技術です。

⑤原石の色調変化のための加熱処理

歴史的に多くの地域で紅色の石が嗜好されることが多く、そのため紅玉髄はカンバートでも主要な加工対象となる石です。しかし、グジャラートで採掘される紅玉髄は、その名の通り紅色をしているものもありますが、黄色に近い色のものが多いです。この黄色の石を人為的に紅色に近づける技術が、古くインダス文明期から行われています。これは石を土器や木屑などで覆い、低温で長時間加熱する加熱処理の技法で、専用の窯を用いて複数回加熱処理を施し、徐々に真紅へと色を変えるものです（**写真 3**）。この作業は、窯の温度を上げてしまうと石が高熱により砕けてしまうため、非常に困難な作業ですが、インド西部では数千年間この技術を保持し、現在でも継承されています。石の色調が変わる理由

写真 2　弓錐技法で石製ビーズを穿孔する職人（2012 年 10 月 23 日筆者撮影）

写真 3　石製ビーズ加熱処理用の窯（2008 年 1 月 19 日筆者撮影）

は、職人らは明確に把握していませんが、おそらく紅玉髄中に微量に含まれる鉄を反応させ、赤くしていると考えられます。

以上の技法で製作された石製装身具は、職人の手により首飾りなどに加工されたり、石製ビーズの状態で販売されたりします。職人によっては、自ら販売する者もいますが、多くはカンバートの町の仲買人の手を経て、カンバートの町やインド各地で販売されます。また、海外に輸入されることもあります。

4　南アジアにおける現在の石製ビーズの利用状況

インド西部では、インダス文明以降、4000年以上石材原産地を中心に石製装身具はつくり続けられています。上記に紹介したカンバート以外にも生産地は複数あり、その生産量は世界的に見ても多いものと言えます。それでは現在の南アジアの人々は、石製装身具をその身に多く着けているのでしょうか。筆者が見聞し、文献などで確認できる範囲で調べてみても、現状ではあまり身に着けられてはいません。現在は、石製装身具の人気は低く、安価なプラスチックやガラス、高価な貴石や金・銀などに人気が二極化し、消費が落ち込んでいます。筆者の調査対象の職人も、インドで近年増加している「中間層」にターゲットを絞り、自ら販路を開拓するために苦慮していますが（彼は自宅で販売する他、首都デリーや大都市ムンバイの博物館、観光地にもなっている遺跡などでも販売しています）、インド国内消費量は年々落ちています。

それでは、現在の南アジアの石製装身具の消費先はどこでしょうか。南アジアの周辺国や、日本や中国など東アジアの国々、イランやアラビア半島、北アフリカの国々、欧米諸国がおもな消費地となっているようです。グローバルな販売経路に関しては、筆者は紅玉髄を中心に「カーネリアン・ロード」と呼称し、その実態の解明を試みていますが［小磯・遠藤 2012］、その詳細に関しては紙幅も足りないため、別の機会に論じることとしたいと思います。そこで以下、南アジア内での消費に関して現況を紹介します。

南アジアで伝統的に石製装身具を身に着け続ける集団としては、ヒンドゥー教やイスラーム教の民間診療士、修行者などが各地に点在しており、現在でも石製装身具を身に着けた姿を確認できます。とくに南アジア各地を遊動する民間診療士は、天然石に宿るとされる効能などを習熟しており、その販売をも担っています（**写真 4**）。同様に伝統的な音楽や踊りを提供する、遊動する楽人集団もかつては石製装身具を身に着けていたようですが、現在はプラスチックやガラスに置き換えられ、天然石を身に着ける者は減っているようです。民間診療士は、石のもつ効能を石とセットで売るため、プラスチックやガラスへの代替えは不可能ですが、楽人はより安価なプラスチックやガラスへの代替えを行っていると考えられます。

上記の集団以外にも、インド憲法上の指定部族とされる一部の少数民族の人々が石製装身具を身に着けることが知られていますが、本稿ではとくにインド北東部（ナガランド州とマニプル州）、ミャンマー北西部（ザガイン管区）にまたがるナガ丘陵に居住する民族集団ナガについて紹介します。民族集団ナガは、単独の集団ではなく言語や社会制度も異なる40集団ほどの人々の総称で、山岳地帯の尾根部に集落を形成し、衣服をもたず、首狩りを行い（一部の集団は1970年代まで行っていたとされています）、精霊信仰などの共通点をもっています。彼らの共通点の1つには、男女ともに装身具で身を飾るというものもあり、とくにナガ丘陵南部の集団は赤い石製装身具を嗜好しています。彼らは、石製装身具の生産能力をもたないため、他地域からもち込まれたものを利用していますが、

写真 4　遊動するイスラーム教の民間診療士（2011 年 12 月 10 日筆者撮影）

確認できる範囲では中世以降数百年以上、石製装身具を嗜好し続けています。

しかし、19 世紀以降のナガ山地は徐々にキリスト教化され、伝統的な習俗が未開の象徴とされ、装身具を廃棄、もしくは売却するようになりました。さらに、第二次世界大戦の日本軍襲来時に消失したり、インド独立後にインド軍による略奪（ナガ地域も独立を目指し、それを阻止するためインド軍が侵入）により消失したりと、戦災による消失が近年起こりました。このように、外部からの影響で装身具を失いつつありましたが、ここ最近、情報の共有化が容易な時代となり、世界各地のマイノリティーの現状を知るにつれ、新たに「ナガ」概念が創造されつつあります［Oppitz *et al.* 2008］。そして、その象徴として、装身具が見直されているのです（**写真 5**）。これは国境や州境により分断され、さらに村ごとに異なる文化をもったマイノリティーとして、ある程度の勢力を得るために地域で団結し、自己アイデンティティーを確保するための行為であると言えます。

一度喪失した装身具は、「富としての価値」や「アイデンティティーの再認識」により、ナガ山地では現在急速に需要が高まっています。「ファッション」の一部に利用する風潮もあります。石製装身具はインド中心部に比べ、移動コストが加算され、数倍と高価でなかなか入手し難いです。しかし、プラスチック製のものは比較的入手しやすく、軽く壊れにくいという点もあり、現在は主流になりつつあります。各民族集団により、装身具のデザインや素材、色は異なり、各々その違いを認識していますが、デザインや色などの意味は古老でも喪失しており、単に象徴的なものとなっています。石製のものを「original」と呼び、特別視していますが、彼ら自身はガラスと石の区別もできず、素材に関する知識

写真 5　ナガ丘陵の新たな伝統「ホーンビル・フェスティバル」で装身具を身に着ける人々
（2011 年 12 月 6 日筆者撮影）

も喪失しています。

以上のように、ナガ山地の石製装身具を取り巻く状況を見ましたが、これは世界各地での伝統社会での石製装身具に関する動向の縮図とも言えます。実物や価値の消失と、象徴としての再認識、これが多くの伝統社会における石製装身具の現状であります。

5　南アジアの石製ビーズのこの先

石製装身具の生産地である南アジアにおいて、現在、富裕層は金、中間層以下は銀やガラス、プラスチックを使用し、高価でも安価でもない準貴石製装身具の需要は低く、生産者も後継者不足に悩み始めています。南アジアの周縁部や一部の遊動民に利用されていますが、多くは海外へ輸出されています。先史時代から中世までは、準貴石製装身具の世界最大の生産地だった南アジアは失墜し、現在は中国や南米産の準貴石が圧倒的に多くなっています。

石製装身具はナガ山地のような伝統社会で衰退しつつありますが、欧米や日本などの先進国では安価でエキゾチックな魅力をもち、ファッションとして人気となっています。日本でもパワーストーンと称して、新たな価値が創造され多く販売されています。そのため、大きな市場ではないものの、石製装身具の生産者を支える市場は存在し続けています。しかし、世界的にはインターネットが石製装身具の主要なマーケットとなっており、社会的、宗教的背景をもたない愛好家が支えています。これまでの仲買人を通しての販売では、活路を見いだせなくなりつつあり、生産者も自ら新たな販路を開拓する必要があります。インドやパキスタンで石製装身具を生産する、筆者の調査対象者らも自ら SNS アカウントを取得し、英語を学び、直接販売する手段に移行しつつあるため、今後の動向を注視する必要があります。

＜参照文献＞

遠藤仁　2013「工芸品からみたインダス文明期の流通」長田俊樹編『インダス 南アジア基層社会を探る』京都大学学術出版会、pp. 179-204。

遠藤仁　2017「モノづくりと専業化――インダス文明の事例」『WASEDA RILAS JOURNAL』5: 485-489。

遠藤仁・小磯学　2011「インド共和国グジャラート州カンバートにおける紅玉髄製ビーズ生産――研究序説」『東洋文化研究所紀要』160: 340-376。

小磯学・遠藤仁　2012「赤い石がつくる道――カーネリアン・ロードをたどって」『季刊民族学』140: 37-84。

Karanth, R. Viswanatha 2000 *Gems and Gem Industry in India*. Bangalore: Geological Society of India.

Kenoyer, Jonathan Mark, Massimo Vidale and Kuldeep Kumar Bhan 1991 Contemporary Stone Beadmaking in Khambhat, India: Patterns of Craft Specialization and Organization of Production as Reflected in the Archaeological Record. *World Archaeology* 23(1): 44-63.

Kenoyer, Jonathan Mark, Massimo Vidale and Kuldeep Kumar Bhan 1994 Carnelian Bead Production in Khambhat India: An Ethnoarchaeological Study. In B. Allchin ed. *Living Traditions: Studies in the Ethnoarchaeology of South Asia*. New Delhi: Oxford & IBH Publishing, pp.281-306.

Oppitz, Michael, Tomas Kaiser, Alban von Stockhausen and Marion Wettstein 2008 *Naga Identities, Changing Local Cultures in the Northeast of India*. Gent: Snoeck Publishers.